

⑥ 岡田菊次郎Ⅰ

岡田菊次郎は、一八六七年（慶応三年）、安城村戸崎に生まれ、一八八九年（明治二二年）に安城村役場の書記を振り出しに同村助役・村長となり、一九〇三年（明治三六年）には愛知県会議員になった。引き続いて一九一〇年（明治四三年）には安城町長・同町農会長・郡農会副会長を歴任するなど、各方面（産業組合・水利組合）で活躍したことから「安城生みの親」とたたえられている。

一八九九年（明治三二年）、碧海郡会議員になったばかりの菊次郎は、愛知県会議長の内藤魯一^{ろいち}らと協力し、三河に農林学校を誘致する運動を始めた。翌年、県議会に建議案が提出され、三河に農林学校を設置することが決まった。場所については、額田郡は羽根、宝飯郡は蒲郡、そして碧海郡は、菊次郎が碧海郡長の高坂景頭^{かげあき}の協力を取り付けたことから、安城を候補地としてそれぞれ誘致運動を始めた。県側は、誘致の条件として、敷地八町歩分の提供、教員住宅九棟の新築、通学道

路の建設の三条件を示して、地元でこれを引き受けてもらえば、そこに決めたいという意向であった。安城村では村長をはじめ村民はみな反対したが、菊次郎は、ただ一人「なんとかなるからこの場合は引き受けましょう」と、独断で承諾してしまった。翌日、村長は辞職してしまい、村民らによって反対運動が起こされた。それに対して彼は、「これからは教育が大事なんだ。たとえ今苦しくとも、学校ができればきっと安城は大きく発展する。こないない機会はまたとないんだ。皆が子や孫の将来を考え、この安城を愛するならば、このところは賛成してくれないか。後になれば学校ができてよかったということは、火を見るより明らかなことだ」と村民に訴え、何とか反対運動を抑えることができた。実は、農林学校の敷地は、すでに買収を終え碧海郡に寄付しており、このことによって彼は、県側との交渉でも余裕を持つて臨めたのである。実際の造成工事は大変だった。盛り土をす



▲岡田菊次郎像（御幸本町）

る土砂の調達だけでも苦勞し、予定地内を通っていた悪水を敷地外へ移して川幅を広げ、余分に出た土を盛り土に利用した。村内はもちろん、周辺の村々からも無償で労力の奉仕を受けた。教員住宅の新築、通学道路の建設も含めて、この事業が成功したのは菊次郎の政治力に負うところが大きかった。

農林学校は、農業の近代化を担う人材を多く輩出し、日本デンマークの基礎を築くことになった。これも元をたどれば菊次郎の農林学校誘致運動から学校施設の完成に至るまでの献身的な努力なくしてはあり得ないものであった。そのことは、初代校長の山崎延吉^{のぶよし}が一番よく知っていた。そのために山崎は、後年、「業績不滅生命永遠」と彼に最大級の賛辞を贈ったのである。この言葉は、御幸本町にある彼の銅像の台座に、今もプレート^{プレート}の形で残されている。

文 星野光俊



▲我農生（山崎延吉）書の台座プレート（御幸本町）